



10. 吹通川河口のマングローブ

川平、崎枝、於茂登トンネル周辺、バンナ岳など生息しているような場所を調べたが、とにかくどの場所へ行ってもすべて乾きすぎているので、ワラジムシがいなかった。側溝にたまった落ち葉さえもカラカラに乾いていた。このような場所は雨の日から日数がたち、腐食化が進んでいるためか、ワラジムシの類よりもヨコエビの仲間のオカトビムシばかりのすみかになっていることも多かった。

今回の八重山の2つの島で判ったのは石やベニヤ板の裏にはコシビロダンゴムシやホソワラジムシ、凹んだ微地形や側溝にはヒメワラジムシ類がいる傾向が見られたが、ヒメワラジムシ類に代

わって、ヨコエビ目が出現するのは、腐りかけじゅくじゅくした環境で、全体としては大型土壌物の多様性の低い場所に多いようだ。

昼になり、帰りの飛行機の時刻が近づいたので最後の調査地を空港に比較的近いバンナ岳にした。ここでも貧果ではあったがバンナ岳は市街地に近い山で、食性の違いを除けば二上山か呉羽山にしているような感じであった。

街側の駐車場で荷物をまとめた。大きな碑があり、バンナ公園には戦中、石垣島の山中へ疎開させられマラリアで死んでいった多くの人々が眠っていることが記されていた。美しいさんご礁、白砂、緑の山の八重山にも悲惨な歴史があり、離島であるが故の幾多の悲劇に思いをはせた。

亜熱帯から、温帯の初冬の名古屋、そして富山に戻るための、着替えをし、石垣市の市街地に戻った。その荷物を送り、レンタカーを返し、空港まで送ってもらって、やっと、我慢して飲めなかったビールを再び八重山そばといっしょに食べた。

結局、今回、石垣島のワラジムシはさほど多くなかったが、さまざまな体験をできた。ドライブをしに来たような感じでもあるが、これも仕方がない。現地調査はたいへんだが、予期せぬ発見がある。いつもながら調査の後のビールは最高！

平成16年度第3回野外研修会報告
— 虻が島の植物相 —

中川定一

日時：平成16年6月20日（日）

午前10時～午後3時

場所：氷見市虻が島

目的：高等植物の調査

参加者：小川徳重、鎌仲郁之助、久保秋次、
武田宏、中川定一、本多省三、増田恭次郎、
栄君子、野間喜代美

1. 海浜植物の開花期

虻が島へは、渡し船を使わなければならないが、船が営業を始めるのは、毎年夏休み直前である。一方、海浜植物の多くの開花期は6月であるため、夏に島に渡っても海浜植物の花後で、同定するには適していない。そこで今回は、渡し船を手配したのは6月に入ってからである。

また、沿岸島の植物の同定に際しては、対岸や近くの島の植物の分布状況も参考になる。しかし、残念ながら、富山県側の沿岸は道路や消波ブロックなどで海浜植物の生育地はないため、どうしても七尾市や鹿島半島の観音島（陸続き）まで足を運ばなければならない。虻が島と観音島は環境や植生が良く似ているので参考になる。

2. 同定上問題としていた植物群

虻が島の高等植物相については、菊池（1936）、植木（1958）、氷見市教育委員会（1976）、長井ほか（1993）などによって報告されている。その中から筆者が以前から同定上問題としていた植物群があったので、以下に抽出し、今回の現地調査で確認することを目的とした。なお、1992年と2004年には男島、女島別の調査記録もあるが、今回は紙面の関係で省略した。

表中36とあるのは菊池（1936）の調査。同様に58は植木（1958）、76は氷見市（1976）、92は長井ほか（1992）、04は今回（2004年）の調査を表す。

イネ科

種名	36	58	76	92	04
ケカモノハシ			○		
カモノハシ	○				
ヨシ	○	○	○	○	○
ツルヨシ		○			

イネ科で一番勢いのある種はヨシ、カモジグサ程度であった。カモノハシは海には近いが、塩水の入らない湿地に生え、ケカモノハシは島尾浜のような浜砂に生育する。今回両種とも確認できず淡水湿地が存在しないことから、カモノハシは同定の誤りでケカモノハシは消失した可能性が高い。ツルヨシの生育記録も疑わしい。

ヤマノイモ科

種名	36	58	76	92	04
ヤマノイモ	○	○	○	○	○
オニドコロ			○	○	

ヤマノイモとオニドコロはよく似ている。環境によってヤマノイモの葉は対生になったり、互生になったりする。オニドコロはいつも互生である。今回は、ヤマノイモのみが確認された。葉元を噛んで確かめた。

イラクサ科

種名	36	58	76	92	04
ラセイタソウ		○			
ヤブマオ	○	○	○	○	
カラムシ	○	○		○	○
アオカラムシ		○			
ナガバヤブマオ	○				

ラセイタソウは、富山県の絶滅のおそれのある野生生物（富山県 2003）には絶滅と評価されているが、日本の野生植物（佐竹ほか 1982など）には分布は太平洋側とあるし、石川県側の資料には出てこない。元々から生育していなかったと考えられる。

アオカラムシとカラムシ、この差は微妙である。葉裏の白い綿毛の度合いによって、どうにでも判定できる。虻が島のものは茎の先端の小さな葉には綿毛があり、根元に近づくと綿毛が

無かった。

ナガバヤブマオは陰湿な谷か小川の周辺でみる
が、虻が島にはそのような生育環境ではない。

この科で一番不思議に思えるのは、能登のどの
海岸にも生育しているハマツメクサが無く、石川
県に正式に記録されていないウシオツメクサが記
録されてきたことである。また、日本の野生植物
(佐竹ほか 1982など)によれば、ウシオツメク
サの分布は太平洋側とされており、富山県の絶滅
のおそれのある野生生物(富山県 2003)で海岸
砂浜に生育するとされるのもおかしい。

石川県の文献でウシオツメクサが出てくるのは
輪島市史資料編第五巻(若林 1973)ぐらいであ
る。ウシオツメクサは、石川県内や能登半島にあ
まりないものの、この植物リストには舩倉島と記
載されている。生育場所は塩水の出入りする岩の
裂け目とある。能登の山を歩く会員の表氏によれ
ば、1年目は探したが見つけることが出来なくて
2年目によく見つけたと言うことであった。生
育環境は塩水の出入りする岩の裂け目で、若林
(1973)の記載と一致する。中央植物園の大原氏
も舩倉島でウシオツメクサを見られたという。

ゲミ科

種名	36	58	76	92	04
マルバゲミ		○	○		
アキゲミ				○	○
マルバアキゲミ	○				

同じ木を見て、それぞれ同定者によって名を変
えて記録されたと思われる。マルバアキゲミの産
地は太平洋側とあるが、能登半島にもわずかに産
する。葉は丸い。また、マルバゲミは加賀南部の
海岸林に生育するが能登半島にはない。この三種
は著しく葉の形が違っている。

オオバコ科

種名	36	58	76	92	04
オオバコ	○	○	○		
トウオオバコ	○	○	○	○	○

筆者は2年に1回は必ず夏に虻が島に渡る。ト
ウオオバコがある年とない年とがあって、中田浜
に植えてある年もある。昔はあったが、年によっ
て消えることもあるらしい。今回の調査では、時
期が早かったためか区別がつかない。富山大学理
工学研究科の山崎さんの染色体調査でトウオオバ
コと決定した。

3. 新たに記録される植物

イヌガラシ、ハマゼリ、カナムグラ、クマノミ
ズキ、コナスビ、オカトラノオ。

4. サギの糞害

女島はサギの糞で悪臭に満ちており、木の葉や
地上は白くなっていた。被害を受けている木はタ
ブノキ、トベラ(県希少種)で大型の草のハマウ
ド(県絶滅危惧種)などであった。また、砂浜も
以前より減少しているようで、流木、プラスチック
のゴミでスナビキソウ(県希少種)の生育地は
狭められていた。新しく記録された植物は6種に
なるが、これらはサギが運んだものにちがいない。
虻が島のサギの糞害に関し、氷見市教育委員会に
問い合わせことで分かったことは次のとおり。

- ・ 虻が島とその周辺は県の名勝・天然記念物
であるが、管理は市にまかされている。
- ・ 昨年暮より3回もサギの巣を取り払ったが
効果がなく、すぐに巣を掛けられる。

なお、虻が島は能登半島国定公園内で特別保護地
域に指定されている。

参考資料

- 氷見市教育委員会.1976.虻が島・唐島の生物相調
査報告.
- 菊池勘左エ門.1936.富山湾虻が島の生物.富山高等
学校博物教室.
- 長井真隆・渡辺信・田中晋.1993.虻が島の高等植
物目録.富山の生物32:10-17.
- 佐竹義輔ほか編.日本の野生植物 I.1982.305pp. II.
1982.305pp. III.1982.305pp. 平凡社.東京.
- 富山県生活環境部自然保護課.2003.富山県の絶滅
のおそれのある野生生物.352pp.富山.

- 植木忠夫.1958.虻が島の生物を探る.虻が島の生物.
氷見市文化財保存会.1-30.
- 若林喜三郎ほか.1973.輪島市史資料編第五

- 巻.314pp.輪島市役所.石川
- 山歩きの足あと編集委員会.2002.山歩きの足あ
と.498pp.能登の山を歩く会.石川.



トウオオバコ



サギの糞害